

織田信長 第六天魔王、世界へ

著者：安田大介

内容

第一章 本能寺、炎の夜	4
第一話 光秀謀反 信長の命は如何に.....	4
第二話 天下を捨てた魔王、海を渡る.....	14
第三話 第六天魔王、世界と対峙す.....	31
第四話 信長、世界へ出航.....	48
第五話 南シナ海、魔王降臨.....	49
第六話 信長、マカオへ.....	62
第七話 茶会という名の処刑.....	73
第八話 信長、覚醒.....	84
第九話 信長、大陸侵入.....	98
第十話 揚子江、開戦.....	112
第二章 海を越える魔王	126
第十一話 龍の逆鱗、魔王の進撃.....	126
第十二話 紫禁城、震撼す。魔王の宣戦布告.....	138
第十三話 国家という虚構.....	146
第十四話 魔王、唯一法となる.....	154
第十五話 魔王、北京へ.....	166
第十六話 世界、呼吸を奪われる.....	177
第十七話 信長、三つ巴へ.....	189
第十八話 信長、揺らぐ.....	199
第十九話 信長、神域侵入.....	210
第二十話 西方、迎撃.....	218
第三章 東洋制圧戦争	228
第二十一話 信長、世界を統合す.....	228
第二十二話 魔王、神々と激突.....	237
第二十三話 信長、東洋を終わらせる.....	246
第二十四話 完全統合.....	255
第二十五話 完璧すぎた支配.....	264
第二十六話 神と魔王の狭間で.....	273
第二十七話 世界、暴走.....	286
第二十八話 神は、修正を選んだ.....	300
第二十九話 人間の終焉.....	311
第三十話 信長、神に挑む.....	322
第四章 神なき世界	333

第三十一話	五信長、神を解体す	333
第三十二話	神の正体	342
第三十三話	魔王、分裂	351
第三十四話	神なき世界	365
第三十五話	神の血	376
第三十六話	神話、分岐す	387
第三十七話	神話戦争	396
第三十八話	孵化前夜	407
第三十九話	天下布武・最終定義	418
第四十話	天魔、還らず	428
第五章	世界の終わりと始まり	439
第四十一話	不正解	439
第四十二話	神になれなかった者	452
第四十三話	魔王、塵に還る	464
第四十四話	新世界、胎動	478
第四十五話	灰の中から、龍は昇る	497
第四十六話	戦国、再起動	513
第四十七話	徳川の意地、伊達の野望	527
第四十八話	神の不在、人の覚醒	538
第四十九話	魔王の遺産、人類の選択	548
最終話	夢の終わり、歴史の始まり	561

第一章 本能寺、炎の夜

第一話 光秀謀反 信長の命は如何に

天正十年、六月一日。

京の街は、ねっとりとした肌にまとわりつくような湿り気を帯びた熱気に包まれていた。

本能寺の境内に立ち込める空気は、平時とは明らかに異質な、重く冷ややかな沈黙を湛えている。

織田右府信長は、書院の奥で一人、南蛮渡りの地球儀を見つめていた。蠟燭の炎が微かに揺れ、その表面に描かれた未知の版図を不規則に照らし出す。

この日、信長の胸中にあったのは、天下統一を目前にした達成感ではない。むしろ、底知れぬ虚無感であった。

毛利はもはや風前の灯、北条も上杉も膝を屈しつつある。日ノ本という小さな島国の中で、これ以上何を奪い、何を築くというのか。

「……狭いな」

不意に漏れた呟きは、誰に聞かせるものでもなかった。

信長の指先が、海を隔てた遥か彼方、大明帝国や天竺、そして南蛮諸国が記された辺りをなぞる。

日ノ本の王として君臨すること。それは、この小さな盆地で神仏を自称し、旧態依然とした公家や寺社勢力と泥沼の権力争いを続けることに過ぎないのではないか。

信長は、自身の内に芽生えたこの奇妙な違和感の正体を知っていた。それは「飽

和」であった。

かつて尾張のうつけと呼ばれた頃、彼の目に映る世界は無限の可能性に満ちていた。しかし、頂点が見え始めた今、その景色はあまりにも色褪せて見える。

「上様、お召し物を持ってまいりました」

襖の向こうから、森蘭丸の落ち着いた声が響く。

信長は地球儀から目を離さず、短く応じた。

「入れ」

蘭丸が静かに室内へ足を踏み入れる。その端正な顔立ちには、平時とは異なる陰しさが刻まれていた。

彼は信長の背後に控えると、声を潜めて告げた。

「京の町衆の間で、妙な噂が流れております。播磨の秀吉様への援軍として出陣したはずの惟任日向守（明智光秀）の軍勢が、亀山から東へ舵を切ったとの報が」

信長は眉一つ動かさない。光秀の謀反。それは、論理的に考えればあり得ぬ話ではない。だが、今の信長にとって、それはもはや瑣末な事象に過ぎなかった。

「光秀か。奴もまた、この狭い日ノ本の枠組みの中で、己の居場所を探しておるのだな」

信長の手元には、先日届いた一通の密書があった。差出人は不明だが、そこには南蛮の宣教師たちが本国へ送ったとされる書簡の写しが記されていた。

『織田信長は、この地の王としては卓越しているが、世界の理を知らぬ野蛮な君主

に過ぎない』

その言葉は、信長の自尊心を傷つけるどころか、むしろ彼を激しく昂ぶらせた。

世界は、自分を「野蛮」と断じた。ならば、その世界の理とやらを、この手で直接確かめてみたい。

「蘭丸、茶を淹れよ。今夜は、少しばかり長い夜になりそうだ」

信長は、自身の身体に走る奇妙な熱を感じていた。それは武者震いとは異なる、未知への渴望に近い感覚であった。

外では、夜鳥が不気味な声で鳴いている。

京の闇は深く、その奥底で、巨大な運命の歯車が軋みを上げて回り始めていた。

突如、静寂は切り裂かれた。

乾いた銃声が一つ、夜の静寂を打ち破り、続いて無数の関の声が本能寺を包囲した。

「水色桔梗の旗印……！ 惟任日向守、謀叛にございます！」

蘭丸が叫び、刀を手にする。

信長はゆっくりと立ち上がった。書院の窓から外を見れば、既に寺の周囲は無数の松明によって昼間のような明るさに照らし出されている。

鉄砲の銃声が断続的に響き、土壁が砕け、瓦が飛び散る。

明智の軍勢は一万を超える。対する寺内の手勢は、わずか百余。勝敗など、戦う前から決していた。

「是非に及ばず」

信長の口から出たのは、諦念ではなく、清々しいほどの決断であった。

彼は愛刀、左文字を手にとると、燃え上がり始めた本堂へと向かう。

火は瞬く間に広がり、古い伽藍を真っ赤な舌で舐め上げる。煙が視界を遮り、熱気が肌を焼く。

「上様！　ここは既に包囲されております。せめて、御自害の場を……！」

必死に訴える蘭丸を、信長は冷徹な眼差しで見据えた。

「自害？　誰がそのようなことを決めた。蘭丸、貴様もこの火の中で死ぬつもりか」

信長の言葉に、蘭丸は息を呑んだ。

「天下は、要らぬ」

信長は炎の中で言い放った。

「日ノ本の天下など、もはや我が身を縛る鎖に過ぎぬ。光秀にくれてやるわ。余は、この狭い枠を飛び越える」

信長の身体には、ある異変が起きていた。常人であれば煙に巻かれ、呼吸すら困難なはずの状況で、彼の感覚は研ぎ澄まされ、周囲の空気の流れが手に取るようになった。

これは、死を覚悟した者の狂気ではない。むしろ、極限状態の中で開花した、生命の本能であった。

「蘭丸、案内せよ。この寺の地下にある、古い水路を」

蘭丸の目が驚愕に見開かれる。

「なぜ、それを……。あれは足利の時代より秘せられた、逃亡用の……」

「知らぬとでも思ったか。この京の地下は、古の時代から蜘蛛の巣のように水路が張り巡らされている。それこそが、この都が幾度も戦火に焼かれながら、血脈を絶やさなかった理由よ」

蘭丸は瞬時に判断を下した。主君の瞳に宿る光が、絶望ではなく、未知なる野望に燃えていることを察したのだ。

「承知いたしました。地下への入り口は、奥の茶室の床下に。……なれど、追手はすぐそこまで」

「来させよ。火がすべてを隠す」

信長は、燃え落ちる天井を左文字の一閃で切り払い、蘭丸と共に煙の渦巻く奥へと突き進んだ。

背後では、明智の兵たちが「信長の首を上げよ！」と叫びながら、業火の中へとなだれ込んでくる。

だが、彼らが辿り着いた時、そこには燃え盛る空っぽの寝所があるばかりであった。

信長は、自身が築き上げてきた「天下人」という虚像を、炎の中に投げ捨てた。

今、この瞬間、彼は織田信長という歴史の記号から解き放たれ、ただ一人の「個」へと立ち返ろうとしていた。

神仏を否定し、己のみを信じてきた男が、今度は己自身さえも脱ぎ捨てようとしている。

地下へと続く狭い階段を下りる際、信長は一度だけ振り返り、燃え落ちる本能寺を見つめた。

それは、彼が愛した日ノ本という舞台との、永遠の決別であった。

地下水路は、冷たく湿った空気に満ちていた。

頭上からは、寺が崩落する轟音と、兵たちの怒号が微かに響いてくる。

暗闇の中、蘭丸が手探りで松明を灯す。その揺れる炎に照らされた信長の横顔は、もはや魔王のそれではなく、獲物を狙う野獣の鋭さを帯びていた。

水路には膝の高さまで泥水が溜まり、腐敗した臭気が鼻を突く。

「この先は、鴨川の河原近くまで通じております。そこから東山を抜け、堺へと向かうのが最善かと」

蘭丸の異常なまでの冷静さと判断力が、信長を支えていた。彼はただの小姓ではない。信長が最も信頼する、もう一人の己であった。

「堺か。あそこには、海があるな」

信長は泥にまみれながらも、足取りは力強かった。

一方、地上の日ノ本は、信長の「死」という報によって、未曾有の大混乱に陥ろうとしていた。

備中高松で毛利と対峙していた羽柴秀吉は、この報をいつ、どのような形で受け取るのか。

浜松の徳川家康は、絶体絶命の境地からいかにして逃げ延びるのか。

歴史という激流の中で、彼らは信長の遺志を継ぐ者として振る舞い、覇を競うことになるだろう。

だが、当の信長は、既に彼らの預かり知らぬ地平を見つめていた。

「秀吉も、徳川も、光秀も……。皆、この小さな盆の中で踊るがよい。余は、貴様らが見ることのない景色を見に行く」

夜明け前、二人は鴨川のほとりにある隠し出口から這い出した。

京の街は、本能寺から上がる火柱によって、不気味な赤紫色の朝焼けを迎えていた。

追手の目を盗み、山中を駆け抜け、二人はひたすら西へと向かった。

数日後。

信長の目の前には、見渡す限りの紺碧の海が広がっていた。

堺の港。そこには、巨大な南蛮船が停泊し、異国の言葉が飛び交い、未知の香料の

匂いが風に乗って漂っていた。

信長は、生まれて初めて見る「本物の海」を前に、沈黙した。

伊勢や尾張で見てきた海とは、明らかに違う。この水平線の先には、終わりが無い。

「……これが、世界か」

信長は、波打ち際に立ち、自身の汚れた手を水に浸した。

天下布武の夢は、ここで終わった。そして、より巨大で、より残酷で、より美しい「世界」という名の戦場が、彼の前に現れたのだ。

信長は、傍らに立つ蘭丸に視線を向けた。

「蘭丸、余は決めたぞ。織田信長は、あの日、本能寺で死んだ。ここにいるのは、名もなき一人の男だ」

蘭丸は深く首を垂れた。

「御意にございます。されど、その男が世界の王となることを、私は疑いませぬ」

信長は薄く笑みを浮かべ、再び海へと目を向けた。

その瞳には、もはや日ノ本の地図は映っていない。

彼は、水平線の彼方にある、まだ見ぬ巨大な大陸を、その鋭い眼差しで射抜いていた。

「さらばだ、日ノ本。さらばだ、天下」

信長は一步、砂浜を踏み出した。

その足跡は、既存の歴史という枠を大きく踏み出し、前人未到の航路を描き始めようとしていた。

だが、その背後には、彼を執拗に追い求める運命の影が、静かに忍び寄っていた。

光秀の放った追手か、それとも信長の生存を予感した「あの男」の刺客か。

風が吹き抜け、信長の羽織が大きく翻った。

新たな戦いの幕は、今、切って落とされたのである。

本能寺の焼け跡から、信長の遺体が見つからなかったという報は、瞬く間に日ノ本全土を駆け巡った。

明智光秀は、焦燥に駆られていた。

「なぜだ……！ なぜ首がない！ あの炎の中で、逃げられるはずがなかろう！」

光秀の叫びは、虚しく灰の中に消えていく。

その頃、備中から猛烈な勢いで京へと引き返そうとする一軍があった。

「上様が……。いや、信長公が死んだはずがない」

軍勢の先頭に立つ小柄な男、羽柴秀吉の瞳には、冷徹な計算と、それ以上に激しい野心、そして正体不明の恐怖が混在していた。

「もし、もしも生きておられるのならば……」

秀吉の言葉の続きは、風にかき消された。

一方、堺の港の一角。

信長は、一艘の小さな交易船の甲板に立っていた。

船はゆっくりと岸を離れ、波を蹴って大海原へと漕ぎ出していく。

「まずは、ルソン（フィリピン） へ向かう。そこが、余の新しい城の門となる」

信長の宣言は、潮騒に溶けていった。

だが、その船影を遠くから見つめる、一人の宣教師の姿があった。

彼は十字架を握りしめ、震える声で呟いた。

「デウスよ……。あの悪魔を、解き放ってしまったのですか」

船は、朝日を浴びて輝く海へと消えていく。

それは、一つの時代の終わりであり、同時に、世界が震撼する物語の始まりであった。

織田信長。かつて日ノ本を恐怖させた第六天魔王は、今、その翼を広げ、五大州へと飛び立とうとしていた。

彼を待ち受けるのは、欧州の列強か、大明の英傑か、あるいは未知の大陸の支配者か。

歴史の歯車は、誰も予想し得なかった方向へと、猛烈な勢いで加速していく。

次なる地、ルソン。そこで信長を待ち受ける、最初の「世界の壁」とは。

そして、彼を追う秀吉と家康の動向は。

物語は、国境を越え、大海原を舞台にした空前絶後のスケールへと突入する。

第二話 天下を捨てた魔王、海を渡る

潮騒が、耳の奥で絶え間なく鳴り響いている。それは安土の喧騒とも、戦場の鉄砲音とも異なる、世界そのものが呼吸する音であった。

堺の港を離れて三日。織田信長を乗せた小規模な交易船は、黒潮のうねりに身を任せ、ひたすらに南へと舳先を向けていた。

甲板に立つ信長の肌を、湿り気を帯びた潮風が撫でていく。本能寺の業火で焼かれたはずの皮膚は、奇妙なまでの冷徹さを保ち、むしろ周囲の温度変化を鋭敏に捉えていた。

信長は、自身の身体に起きている変質を自覚していた。

かつては、天下を統一し、日ノ本の頂点に立つことこそが、己の生の完成であると信じて疑わなかった。しかし、死の淵から這い出し、既存の秩序という衣を脱ぎ捨てた今、彼の五感はある人の域を超え、森羅万象の微かな震えさえも感知するまでに研ぎ澄まされていた。

暗闇の中、船底を叩く波の音。帆が風を孕んで軋む音。そして、背後に控える森蘭

丸の、一分一秒の狂いもない規則正しい呼吸音。

それらすべてが、信長の内面で一つの旋律となって響き渡る。

「……蘭丸」

「はっ」

「余の身体から、何かが消えた。そして、何かが入り込んできた。この感覚、貴様には分かるか」

信長は振り向かずに問うた。

蘭丸は、主君の背中に宿る形容しがたい気配に、密かな戦慄を覚えていた。以前の信長が「猛火」であったとするならば、今の信長は、底の見えぬ「深淵」であった。

「上様の御身には、天の理が宿られたように見受けられます。もはや、人の身としての理を超越されたのでは……」

信長は口角を微かに上げた。

「天の理、か。神仏を否定した余に、天が手を貸すというのはか。皮肉なものよ」

信長の手は、甲板の欄干を強く握りしめていた。その指先には、まだ本能寺の煙の匂いが染み付いているような錯覚があった。

日ノ本という土地。そこには、数多の血が流れ、数多の怨嗟が渦巻いている。信長自身、その中心に座し、破壊と創造を繰り返してきた。

だが、海の上には何もない。ただ、果てしなく続く水面と、気まぐれな風があるの

みだ。

この空白こそが、今の信長には心地よかった。

彼は、自身の内に芽生えた「虚無」が、新たな「渴望」へと変換されていくのを感じていた。

それは、土地を奪うための欲ではない。民に従えるための権力欲でもない。

世界という名の巨大な機構が、いかにして回り、いかにして成り立っているのか。その真理を、この手で掴み取りたいという、根源的な知識への欲求であった。

信長の視線は、漆黒の水平線の先、まだ見ぬ異国の地へと注がれていた。

かつて地球儀でなぞったあの版図は、今や単なる絵図ではない。そこには、言葉の通じぬ他者が、見たこともない武器を手に、未知の神を信じて生きている。

その圧倒的な「未知」こそが、信長の魂を揺さぶる唯一の劇薬であった。

「天下は、要らぬと言った。だが、世界は、余を放っておかぬだろう」

信長は独り言のように呟いた。

その瞳には、夜空に輝く北極星が、冷徹な光を宿して映り込んでいた。

船室の机の上に、信長は一枚の書状を広げていた。

それは、かつて安土城に招いた宣教師オルガンティーノから贈られた、南蛮の航海術に関する覚え書きと、断片的な世界の記述である。

信長は、揺れる灯火の下で、その文字を穴が開くほど見つめていた。

ポルトガル、イスパニア。それらの国々が、いかにして大海を渡り、黄金と改宗を求めて東の果てまで辿り着いたのか。

彼らの原動力は、信仰という名の狂気と、富という名の欲望である。

「神を信じる者が、これほどまでに残酷な略奪を繰り返す。矛盾しておるな」

信長は鼻で笑った。

彼にとって、神仏とは人を縛るための道具であり、あるいは弱者が縋るための幻影に過ぎない。

だが、南蛮人たちは、その幻影を旗印に掲げ、地球の裏側まで版図を広げている。

その「意志の強さ」だけは、信長も認めざるを得なかった。

「蘭丸、この船に乗っている南蛮人の数は」

「船長を含め、五名にございます。残りは堺の商人たちが雇った水夫たち。皆、上様の正体は知らず、ただの『没落した商人』として扱っております」

「それでよい。余を『織田信長』として見る者は、もはやこの世に一人も居らぬ方が都合がよい」

信長は、腰に差した左文字の柄に触れた。

この刀も、もはや戦国の覇権を象徴する道具ではない。

未知の脅威を切り裂くための、実戦の具に過ぎない。

信長の思考は、既にルソン、そしてその先にある大明帝国、天竺へと飛んでいた。

日ノ本の戦は、いわば庭先での小競り合いであった。

石高を競い、城を築き、家系を重んじる。そのような旧態依然とした価値観は、この大海原の前では塵に等しい。

世界はもっと広く、もっと残酷で、もっと美しいはずだ。

南蛮船の船底からは、積まれた香料や硝石の匂いが立ち上ってくる。

それは、日ノ本の戦場にはない、異国の生命力に満ちた匂いであった。

信長は、船内に備え付けられた羅針盤を指先で弾いた。

磁石の針は、常に北を指し示す。

「理、か。この針を動かしているのは、神の御業ではなく、地の底に流れる力の流れよ」

信長は、この世のすべてには「理」があると考えていた。

雷が落ちるのも、雨が降るのも、人が死ぬのも、すべては神の意思ではなく、何らかの法則に基づいている。

その法則を解き明かし、利用した者こそが、真の覇者となる。

彼が鉄砲を組織的に運用し、古い騎馬戦法を打破したのも、その「理」を誰よりも早く理解したからに他ならない。

ならば、世界という舞台においても、同じことが言えるはずだ。

南蛮人たちが海を支配しているのは、彼らが「海を渡る理」を知っているからだ。

「余がその理を奪えば、海も、世界も、余の意のままになる」

信長は、自らの内に再び燃え始めた野心の火を、静かに見つめていた。

それは、以前のような破壊的な衝動ではない。

より冷徹で、より広大で、すべてを飲み込むような静かな火であった。

彼は、船室の小窓から、波間に碎ける白泡を見つめた。

その泡の一つ一つが、日ノ本で散っていった数多の将兵たちの魂のように見えた。

光秀、秀吉、家康。

彼らは今、この瞬間も、信長の「死」という虚像を巡って、血みどろの駆け引きを続けていることだろう。

信長は、彼らを哀れむような、あるいは懐かしむような、複雑な感情を抱いた。

「踊るがよい。貴様らが築き上げる天下という名の幻の中で。余は、その外側から、貴様らの理を壊してやる」

信長は、ペンを手に取ると、白紙の地図に一本の線を引いた。

それは、堺からルソンを抜け、さらに南へと続く、かつて誰も描いたことのない航路であった。

その頃、日ノ本は、信長の予感通り、未曾有の激動に包まれていた。

山崎の地。

「……逃げたか」

羽柴秀吉は、本能寺の焼け跡から運ばれてきた、わずかな遺留品を前に、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

彼の目の前には、主君・信長が愛用していたとされる、焦げた茶器の破片があった。

だが、そこには肝心の「首」がない。

明智光秀を討ち果たし、主君の仇を報じたという大義名分を得た秀吉であったが、その胸中にあるのは、勝利の凱歌ではなく、得体の知れない恐怖であった。

「官兵衛、貴様はどう思う」

傍らに控える黒田官兵衛は、沈着な面持ちで答えた。

「首がないということは、生きておられるか、あるいは骨も残らぬほどに焼かれたか。左様、考えるのが道理でございます」

「道理、か。だが、あの御仁が、そう簡単に灰になるとは思えん」

秀吉は、泥にまみれた自身の拳を見つめた。

彼は、信長という男の「異常性」を誰よりも近くで見してきた。

常人ならば死ぬはずの場面で、信長は常に予想を裏切る決断を下してきた。

本能寺の変という、完璧なはずの暗殺劇。光秀は確かに信長を追い詰めたはずだ。

しかし、その結末が「行方不明」であるという事実は、秀吉にとって、首を斬られる以上の脅威であった。

「もし生きておられるならば、必ず私の前に現れるはずだ。……いや、そうではないな」

秀吉は、ふと空を見上げた。

「あの御仁は、もはや我らなど見ておられぬのかもしれん」

秀吉の脳裏に、かつて信長が語った「世界の果て」の話が蘇る。

日ノ本を平らげた後、さらに海を渡り、大明をも従える。

当時の秀吉は、それを主君の壮大な夢想だと聞き流していた。

だが、今、その言葉が、不気味な現実味を帯びて背筋を這い上がってくる。

「官兵衛、天下を急ぐぞ。誰よりも早く、私がこの地の主となる。そうでなければ、あの御仁が戻ってきた時、私は……」

秀吉の言葉は、震えていた。

それは、裏切り者としての恐怖ではない。

圧倒的な「上位者」に、再びその存在を否定されることへの、根源的な恐怖であった。

一方、三河の岡崎城。

徳川家康は、静まり返った書斎で、数珠を爪繰っていた。

「信長公、崩御」

その報を受け取った際、家康は人目を憚らず涙を流した。

それは演技ではない。長年、同盟者として、あるいは従属者として、信長の背中を追いつけてきた男の、偽らざる喪失感であった。

だが、その涙が乾いた後、家康の瞳に宿ったのは、氷のような冷静さであった。

「伊賀を越え、命からがら帰還した。これは、天が私に生きよと命じたのだ」

家康は、信長の遺体が見つからなかったという不審な報せを、独自の忍びの網から得ていた。

「服部半蔵」

影の中から、一人の男が姿を現す。

「はっ」

「堺の港に、不審な船が出なかったか。あるいは、京から西へ向かう、異常なほど足の速い者たちの噂はないか」

半蔵は、短く答えた。

「堺にて、宣教師の手引きにより、一艘の交易船が夜陰に乗じて出航したとの報が
ございます。乗客の素性は不明。なれど、その船が向かう先は……」

「どこだ」

「ルソンにございます」

家康は、数珠を握る手を止めた。

ルソン。かつて信長が、堺の商人たちを通じて頻繁に情報を集めていた地だ。

家康の脳裏に、信長のあの鋭い眼差しが浮かぶ。

「信長公は、死んでおられぬ」

家康は確信した。

「あの御仁は、日ノ本という器を壊し、外へ出られたのだ。……なんと凄まじい御
方か」

家康は、深い溜息をついた。

もし信長が生きているならば、日ノ本の天下争いなど、もはや茶番に過ぎない。

だが、家康には家康の役割がある。

信長が去った後のこの荒野を、誰かが治めなければならない。

「半蔵、その船の行方を、可能な限り追え。決して手出しはするな。ただ、あの御仁が何を見ようとしているのか、それを私に伝えよ」

「御意」

半蔵の気配が消える。

家康は、再び数珠を動かし始めた。

その心は、日ノ本の安定と、海の向こうへと消えた巨星への、畏怖に揺れていた。

そして、安土。

明智光秀は、かつての主君の居城で、狂気に似た焦燥に身を焦がしていた。

「なぜだ……！ なぜ首がない！」

彼は、本能寺の灰を、文字通り手で掘り返させていた。

信長の首。それこそが、彼の謀叛を正当化し、天下人としての地位を盤石にするための、唯一無二の証拠であった。

だが、灰の中から出てくるのは、名もなき兵たちの骨と、焼け溶けた武具ばかりである。

「上様は、鬼神か……。あるいは、本当に空へ昇られたのか」

光秀の家臣たちは、変わり果てた主君の姿に、不安の視線を送っていた。

光秀は、信長を殺したことで、己の中の「正義」を貫いたつもりであった。

だが、信長の死体が現れないことで、彼の正義は、出口のない迷宮へと迷い込んでしまった。

「私は、間違っていない。……間違っていないはずだ」

光秀の眩きは、誰もいない玉座の間に虚しく響いた。

彼には、信長の亡霊が、安土の闇のあちこちで自分を嘲笑っているような気がしてならなかった。

「光秀よ、貴様の天下など、この程度のものか」

幻聴が耳を打つ。

光秀は、自身の頭を抱え、床に膝をついた。

彼は知らなかった。

彼が追い求めている「信長」は、もはやこの日ノ本のどこにも存在しないことを。

そして、その「不在」こそが、彼を死よりも残酷な破滅へと導くことを。

航海は、過酷を極めていた。

東シナ海。ここは、日ノ本の穏やかな内海とは異なり、荒ぶる神々が住まう魔の海域であった。

船出した翌週、空は突如として鉛色に染まり、巨大なうねりが船体を翻弄し始めた。

「嵐だ！ 帆を降ろせ！ 舵を固定しろ！」

南蛮人の船長が、聞き慣れぬ言語で叫び声を上げる。

水夫たちは必死にロープにしがみつき、荒れ狂う波に抗っていた。

信長は、甲板の中央に仁王立ちになり、荒れ狂う自然の猛威を、正面から見据えていた。

「上様、危険です！ 船室へお戻りください！」

蘭丸が叫ぶ。彼の体も、激しい揺れで今にも海へ投げ出されそうであった。

だが、信長は動かなかった。

大粒の雨が顔を叩き、海水が全身を濡らす。

だが、信長の瞳には、恐怖の欠片もなかった。

「案ずるな、蘭丸。この程度の嵐で、余の命は尽きぬ。天が余を殺すつもりならば、本能寺で終わらせていたはずだ」

信長は、自身の身体が、嵐の振動と共鳴しているのを感じていた。

波が船体を叩くたび、その衝撃が足裏から脳髄へと伝わる。

風が咆哮するたび、その音圧が鼓膜を震わせ、世界の「怒り」を伝える。

これは、戦場だ。

それも、人が作り出した戦場ではない。

地球そのものが牙を剥き、矮小な人間を試しているのだ。

「来い、荒ぶる理よ！ 余を飲み込んでみせよ！」

信長は、狂気とも取れる歓喜の声を上げた。

彼は、左文字を抜き払い、荒れ狂う風に向かって一閃した。

刀身が雨を切り裂き、一瞬の閃光が闇を照らす。

その瞬間、信長の脳裏に、かつて見たこともない景色が閃いた。

巨大な石造りの城壁、金髪の騎士たち、見たこともない巨大な大砲、そして……十字架を掲げた黒い法衣の男たち。

それは、予知か、あるいは世界が彼に見せた幻影か。

信長は、その景色を強烈に渴望した。

「余の戦場は、ここではない。もっと先だ！」

信長が叫んだ瞬間、船を飲み込もうとしていた巨大な波が、まるで彼の意志に屈するかのように、左右へと分かれた。

偶然か、あるいは信長の放つ「覇気」が、一時的に大気の流れを変えたのか。

船長や水夫たちは、その光景を目撃し、十字を切って震え上がった。

「デウス……。あの男は、デウスなのか、それともサタンなのか……」

船は、嵐の渦中を突き抜け、静かな海域へと滑り出した。

夜が明け、雲の間から黄金色の朝日が差し込む。

水平線の向こうに、緑豊かな島影が見え始めた。

「ルソンにございます」

蘭丸が、疲弊した声で、しかし誇らしげに告げた。

信長は、鞘に刀を収め、濡れた髪をかき上げた。

その顔には、かつての魔王としての陰しさはなく、新しい世界を前にした少年の日のような、無垢な野心が宿っていた。

「着いたか」

信長は、自身の汚れた手のひらを見つめた。

日ノ本の覇者、織田信長。

その名は、この海に捨ててきた。

今、この地に降り立つのは、理を求め、世界を震撼させる、ただ一人の漂泊者である。

「蘭丸、準備せよ。ここが、余の第二の生誕の地となる」

船はゆっくりと、マニラの港へと近づいていく。

そこには、イスパニアの軍勢が築き上げた要塞と、異国の民たちがひしめく活気ある街並みが広がっていた。

信長の第一歩が、ルソンの大地を踏みしめる。

それは、東洋の魔王が、西洋の列強と初めて相まみえる歴史的瞬間であった。

だが、信長を待ち受けていたのは、歓迎の言葉ではない。

港の防波堤には、無数の銃口が並び、不審な船を出迎えるための準備が整えられていた。

「止まれ！ 何者だ！」

異国の言葉で、鋭い警告が飛ぶ。

信長は、その言葉を理解することはできなかったが、相手が抱く「殺意」だけは、皮膚で感じ取っていた。

彼は、薄く笑みを浮かべた。

「挨拶としては、上出来だ」

信長は、悠然と歩みを進めた。

背後には蘭丸。

そして、彼らの前には、世界という名の巨大な門が、重々しい音を立てて開き始めていた。

信長がルソンの土を踏んだその時、港を支配していたイスパニアの将校、ガルシアは、目の前の男に尋常ならざる気配を感じていた。

「東洋の商人と聞いたが……。その眼、ただの商人ではないな」

ガルシアは、自身が戦ってきた数多の敵、あるいは本国の貴族たちとも異なる、圧倒的な「格」の差を直感した。

信長は、ガルシアの言葉に答えず、ただその周囲を囲む兵たちの装備を、値踏みするように眺めた。

最新式のマッチロック式銃、鋼の甲冑、そして、彼らが信仰する十字架。

「……面白い」

信長は、一言だけ日本語で呟いた。

その一言に込められた意志の強さに、ガルシアは思わず一步後退した。

「通訳を呼べ！ この男の素性を洗え！」

ガルシアの叫びが港に響く。

信長は、拘束されることを恐れる様子もなく、むしろ自ら進んで要塞の方へと歩き出した。

彼にとって、ここはもはや異国ではない。